

浄土

六月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承証第三五二号)
昭和三十九年五月二十五日 印刷 昭和三十九年六月一日発行

第三十卷 第六号

表紙の解説

ルル鹿の物語

——西歴前二世紀——

バルフート

ガンジス河がジャムナ河と合流して大いなるガンジス河となるアラハバードの西南に、バルフート大塔の遺跡があります。塔自身はすでになく、アズキ色の石の欄柱のみが主にカルカッタ博物館に収められて人びとの目をひいています。西歴前二世紀といえ、仏教芸術も初期の時代で、他にはサーンチ諸塔の中、第二塔と呼ばれる最古のものがあります。彫刻の題材としては、仏伝、本生話、守護神としてのヤクシャ・ヤクシニなどがありますが、いずれも平面的で立体感にとぼしく、人物の表情も画一的で未成熟の感があります。ただしのちになってマトウラなどに美しい花を咲かせたインド石彫の基となっている点で重要なものです。

ここにあげるものは、欄柱の正面に刻まれたメダリオンで少し右に傾いています。物語は、仏陀の本生で、大鹿が、河に身をなげた男を助け、都に送りますがこの男は国王がこの鹿を生捕ろうとさがし求めているのを聞き、助けられた恩を忘れて王とその軍隊を森に案内します。大鹿は国王に会い、かの男の物語を述べますので、王は大いに怒って男を追放し、大鹿を都に招くというものです。

前面には男を背にのせて救う大鹿、右上に国王の軍隊、右中央に大鹿に敬礼する国王が画かれています。可愛い小鹿が群をなし、河の流れは細い曲線で現わされています。

(佐藤良純)

随真の仏念　　う味で語法ご

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版一〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……観念の念仏を排す……

聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

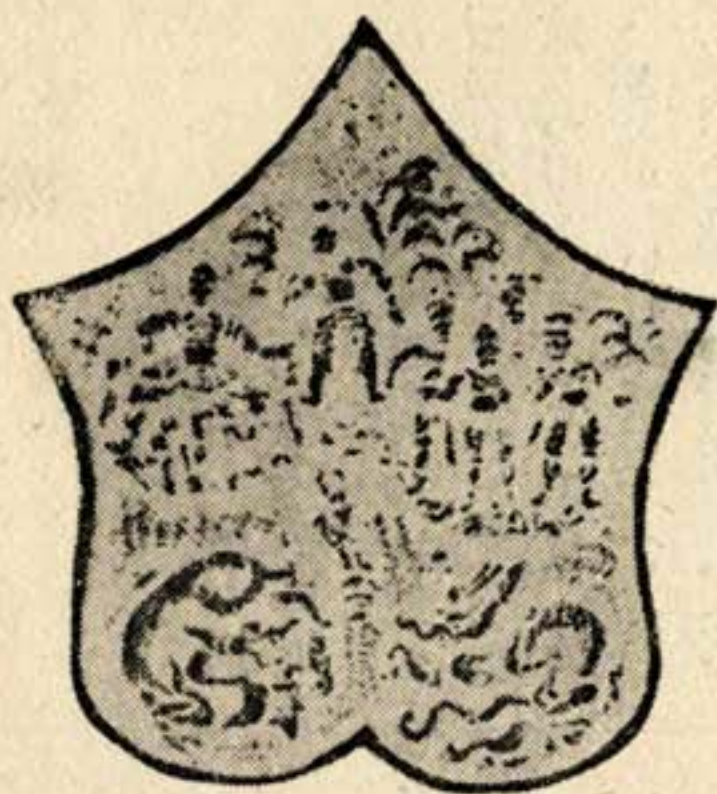
ご法語一〇〇句を収録

発行人

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二一八七番

法然上人御法語



表紙 ルル鹿の物語

随 想.....竹中信常・勝部定昭…(2)

動乱の中に生きたベトナム仏教.....ドン・ヴァン・アン…(4)

—— . —— . —— . ——

続 三部経の再発見.....須 藤 隆 仙…(8)

まろい石合 田 徴 雪…(18)

一片の生活丹 羽 演 誠…(24)

—— . —— . —— . ——

近 世 文 名 録 小林瑞浄先生.....高 橋 良 和…(16)

東南アジア旅行記.....佐 藤 行 信…(12)

茶の湯に 生きた人々 足利義政.....林 左 馬 衛…(22)

ご法語をいただく.....(7)

表紙の解説.....(1)

編集後記.....(33)

—— . —— . —— . ——

中国浄土教 物 語 現在への不安と明日への期待.....牧 田 諦 亮…(28)

赤い椿

竹 中 信 常

(大正大学教授・文庫)

招かれて、先頃、老春の南房に遊んだ。二泊三日の寸旅で、しかも春雨の音もなく降りつづく週日のことであつた。車中も、さわがしい行楽客は一人もおらず、みんな、それぞれの所用を抱いた静かな人々のみであつた。

外房線なので、千葉を出てしばらくの間は、丘陵の間をぬけ、菜の花と蓮華草の綾織りをみせる野を走つた。苗代の上には、柔かい雨足が白くひかつていた。

「大網」のひなびた駅に着くと、急に、ブーンと磯の香が車内に流れはじめ、それから夕ぐれのせまった窓外には、白い汀をみせて外房の海がひらけてきた。せまった山峽をぬけると、列車は安房小湊の駅にとまる。迎えの車に導かれて、海岸近くの小さい旅館に入ったの

子が遊んでいた。

夕餉の膳に出た、ピンと尾を張つた鯛の塩焼きに、さすが「妙の浦」をひかえた土地柄だと、その風味を楽しみ、やがて床に入った。

三時間の旅に疲れて早寝したせい、夕食にかたむけた盃に乾きを覚えてか、夜中にフト目をさまして、枕もとの水さしを引き寄せた。その時、廊下に、ハタハタと軽い足音がして、部屋の前まできて止んだ。「ほかに客はないはづなのに……」と思いながら、それでも、宿の者がなにか用でも思い出したのかと、耳をすませてみたが、足音はそれきりしな

い。耳のせいだと、自分にいいきかせて、あおむきになってウトウトしていると、耳の底から、また、ハタハタと足音がしてくる。今度もまた部屋の前までくると、フッと止まったようである。思い切

掃除

勝 部 定 昭

(大正大学同窓会事務局)

簾の目が立ってきれいに掃き清められた庭を眺め乍ら一服する味はまたかく別、部屋の掃除にくらべて目に見えてきれいになるのでハリアイがある。家の中は目立ってきれいにならないが掃除されているかいはいかは一目でわかる。一日掃除をしない部屋には何かなしほこりつぼさが感じられるものだ。

掃除をした後と前とで、どこと言ってとりたてて変つた所も見えないが、サッパリしていることは一步部屋に入っただけで膚に感じとれる。「掃除」と「おそうじ」と較べると男の掃除と女のおそうじの違いが出ているような気がする。

男の掃除は字面の通り塵芥をすっかり掃き除いてしまわなければ気が済まない。隅から隅まで家中を徹底的にきれい

は、すでに、たそがれの色の一段と深まった頃であった。

通された部屋には、窓辺に小机、そのわきのちがい棚には若い女の人の趣味であろうか、こまごまとしたものが飾つてある。宿舎というよりは、しとりとおちついた若い女性の居間といった感じが漂っていた。

「ホテルなどにあきたお客さまが、ごひいきにして下さいます」

中年すぎの、おちついた女中さんは、そう言いながら、古風な角火鉢に固炭をさしてくれた。雨のせいか、季節のわりに肌寒い陽気である。

「ほかにはお客さまはございませんから、どうぞごゆっくり」

という女中さんの言葉にうながされて、早速入浴して体をあたためる。二階には三間の客室と、広間が一つ。家の造りも旅籠（はたご）といった方が似つかわしく、帳場には、宿の子か、赤いチャンチャコを着た三才ほどのやせた女の

にか冷たいものが走った感じがし襖をしめ床の中にもぐり旅行鞆の底からポケット・ウィスキーをとり出し、口のみであおって、布団をかぶってしまった。

翌朝、女中さんに、「この部屋は……」と口にもで出なかったが、なにもきかず仕度をして階下におりた。

帳場のうしろが家族の居間になっているらしく、雑然とした部屋の片すみに、白い布でおおった机と、四角い箱がみえ、そこからかすかな線香の香りが流れてくるのに、気がついた。

「やあ、お待たせしました。では。」今日の講演会の世話をしてくれているK君が、玄関からはいつてきた。

つれ立って、会場のお寺への道すがら、K君は、自分の檀家である宿の娘が、数日前に亡ったことを話してくれた。

赤い椿が盛りあがるように咲いている寺の庭を横切りながら、宿に帰ったら、早速に、あの白い小さい箱に、供養のお経を上げさせてもらおうと思った。

にしてしまいたい。此所が済んだら彼所もと次々に汚ない所が眼について気になる。気の済むまでやった時にはグツタリつかれて他の事をする余力が無くはない。

たまに徹底的にやっても毎日続けなければほこりは一瞬一瞬にたまっているのだ、毎日毎日掃除だけに全力を傾注しては他の仕事は何も出来なくなる。自然やくめくやくの、おそうじになるのもわかる。男から見ると女の掃除の足りなさが目につく、文句を言うなら貴男がやって下さいとなる。そこで今日こそと思った時にそれこそ徹底的な掃除をして、サッパリとした部屋でグツタリとつかれるのだ。間に合せの掃除ならしない方がいいと、ものぐさなりの理窟をつけて、気に懸けながら、毎日は続かないのが男の掃除だ。掃除をするものにはおそうじの不徹底が気にくわないし、おそうじするものから見れば持続性の無い事は掃除の意味をなさないと反論する。この二つを協力させてどうやら無難にすごしている。

動乱の中に生きたベトナム仏教

ドアン・ヴァン・アン

(サイゴン大学助教授・文博)

ベトナム比丘の護法精神

議をするに至ったのである。

ゴジンジエムが大統領の地位についたのは凡そ十年前に遡る。キリスト教徒である彼が政權を握ると同時に仏教に対する迫害が始まった。次第に激しさを加えてきた仏教迫害に対して仏教界は仏教保衛連派を結成して反対運動を起した。まず反対運動の最初の試みとして、政府に信仰の自由と平等を主張する抗議文を提出した。しかしこの抗議は全く聞き入れられなかった。そこで比丘等は断食を続けて信教の自由を主張したが、この方法も効果はなかった。次に選んだ手段がデモ行為による抗議であったがこれはかえって武力によって断圧される結果となった。そして遂に焼身自殺という悲しい抗

この焼身自殺は世界の人々の注目を集め、またこの行為に対して色々な意見のあったことを知っている。私は当時仏教保衛連派の報道委員長の職にあつたので大方の外国の新聞雑誌には目を通していた。日本の仏教界の要職にある某氏は、焼身自殺に対して、このような行為は非仏教的であるという趣旨の批判をしていた。その人は確か日蓮宗の人であつたと思うが、しかし法華経の中にも、仏法の為には己が身を捨てても惜しまない、ということが説かれている。ベトナムの比丘は護法の為には己が身を捨てても惜しまなかったのである。しかしこれは仏教徒にとっても、また私個人にとっても生涯忘れることのできない悲しい最悪の思いである。焼身

自殺をした僧の中の一人は他ならぬ私の父であった。

こうした教団の抗議は政府を倒すことが目的ではなく、信仰の自由と信教の平等を主張し獲得するためであった。

政府の過酷な仏教弾圧はなお飽きることなく引き続き行なわれた。ベトナムの八五％は仏教徒であり、政府の仏教迫害

は国民の批判を招き、人心を呼び起し、学生・公務員さらには

軍隊の間にも政府を批判する声

が起りデモが行なわれた。事態

は単に国内の問題にのみとどま

らず、国際的な関心を招き、国連が事情の調査を開始した。そして丁度国連の代表がベトナムを訪問しているときにクーデターが勃発した。



ベトナム仏教のありかた

今日信仰されているベトナムの仏教は、歴史的には中国から伝えられたものである。經典の大部分は漢訳經典であり、数多い漢訳經典の中では、阿彌陀經が最も尊重され、法華經も広く誦誦されている。戒律は四分律も梵網經もともに行なわれており、僧侶は比丘戒と菩薩戒の両方を受けている人が

このクーデターは、仏教保衛連派の主張し計画したものである。軍人が愛国の精神と人類愛の立場から実行したものである。といってもクーデターには、間接的には仏教教団の抗議運動が影響している。つまり、仏教保衛連派の護法に基づき抗議運動の結果が人心を覚醒し、国民が政府を批判し、その結果がクーデターと

なったわけである。

クーデターは終り、大統領は死んだ。彼は仏教迫害の主人公であったが、仏教の慈悲には敵、味方の差別はない。大統領の冥福を祈る為にベトナム仏教連派の主催で、サイゴン市の舍利寺に於て盛大な追悼会を催した。この会場の舍利寺は

サイゴン有数の大寺であり、かつて大統領が最も激しく弾圧を加えた寺である。その同じ舍利寺でまた彼の追悼会を行なったことは、

実に運命の皮肉であり、諸行無常の感慨深い。苦難の時代は終って、今ベトナム仏教に

は、二再び平和がもどり前途は明るくなつた。思えばこの平和と自由は武力に対して黙々と素手で立ち向ったベトナム僧の気迫のたまものである。

多い。また座禪も大切な修行の一つである。つまりかつて中国で流布した禪・浄・律の融合の仏教が、今日のベトナムの仏教の形態である。

多数の經典が信仰され、融合の仏教ではあるが、日本のように宗派には分れていない。信仰は統一されている。ベトナム人の仏教信仰の中心は西方浄土の信仰である。

比丘は戒律を守り、阿弥陀經を誦誦し、坐禪をし修行に励んでいる。戒律の伝統を守っている比丘ほど信者の信望は高い。信者は日曜日には必ず寺に参詣し、説教を聞き、一ヶ月に二度（一日と十五日）には精進料理の日を送る。ベトナム人の社会生活と日常生活の指針となっているものは、浄土の信仰と五戒の精神である。戒律にかなった生活をおくり、来世は阿弥陀仏の慈悲にすくわれて浄土に生れることが理想である。

ベトナムの仏教は、今日なお伝統を守り、昔の姿を保持している。しかしながら、今度の動乱を契機として新しい信仰の形態が出てくることも予測できる。

寺院の中にとどまって従来通りひたすら戒律を厳守し修行に励む真摯な姿はまことに敬虔なものを感じ、ベトナム仏教の誇りである。

しかしながら、今、自分が現代の社会機構の中において考

えざるを得ないことは、仏教が、こうした伝統の維持の一面のみにとどまらず、ますますテンポが急となるであろう近代社会の機構に対処できる形に改革することの必要にも迫られてくるのではないか、ということである。今後社会状態の變貌はますますそのテンポが急となるであろう。今のベトナムの仏教には、社会的な面にも、戒律の上にも、人間性の点からも考えるべき問題は多い。日本で学んだ知識を生かして、今後は仏教革新の面にも目を向けたい。この新しい立場も護法と求道の精神に変わりはない。

動亂を体験して末法の時機觀を実感した。阿弥陀經は末法の時の教えであり、まさしく現代の我々の為の教えである。浄土教に「帶業往生」・「惡人正機」の著名な教えがある。罪多い人間でも仏の慈悲によって救われる。この教えは時代感覺に裏づけられて、仏の慈悲に対する確信と人間性の自覺を端的に表明している。この教えの意義を充分に考えてみる必要がある。

従来通りの伝統に生きる第一の立場に対して人間性の自覺に於ても、布教に於ても新しい方法を發見する第二の立場、この二つのグループが今後のベトナム仏教に於てもともに是認さるべきである。

——ご法語をいただく——

をこれども煩惱をば心のまらう人とし、念仏をば心のあるじとしつれば、あながちに往生をばさへぬ也。煩惱を心のあるじとして念仏を心のまらう人とする事は、雑毒虚仮の善にて往生にはきはるる也。詮ずるところ、前念後念のあひだには、煩惱をまじふとも、かまへて南無阿弥陀仏の六字の中に、貪等の煩惱ををこすまじき也。

(念仏行者訓条)

貪りと怒りと愚さという煩惱を人から取り去ることができないから、人は煩惱具足であるというのです。だからといって心の向くままに貪り怒り愚さを振り廻していたのでは、いかにお念仏を申したからといってそれでよいものでありません。こうした三つの煩惱は無くすることはできなくても、起る機会を少なくするように努力することができます。

「まらう人」とは稀にしか来ない人のことです。もし煩惱が起きたにしても、その起きることが次第に稀のことになるようにし、お念仏を唱える時をなるべく多いようにすれ

ば、往生ができます。「あながち」とは強いとか極端にとかの意味であり「さへぬ」とは妨げとまらないことです。それを逆にむやみやたりと貪り怒り、愚さを披露していて、稀にしかお念仏を唱えないようでは往生は難しいことになります。「きはる」とは嫌がられ敬遠されることです。これを雑毒虚仮の善といいます。

雑毒の善とは外見は善の如くにみえるが、実は雑多の害毒をもたらすものということですから。また虚仮の善とは真実の反対であって、外面のみ飾っても内面には何等の真実がない見かけだけの善ということ。不正であり偽りであり内心と外見の一致しない者が、いかに善業を積もうとしても、それは雑毒虚仮の善であって、浄土に往生できません。この句は選択本願念仏集にあるもので、古来いろいろの議論のあった句であります。

これを要するにお念仏を唱えていない時に煩惱の起ることがあるにしても、南無阿弥陀仏と口に唱えている時には貪り怒り愚さの煩惱を起してはならぬと申されたのであります。「かまへて」は決して、必ずという意味

です。このことをもっと強いお詞で申されたのに次のご法語があります。

「物もしらぬ男女のともがらを、すかしはらかして、罪業をすすめ、煩惱ををこさしむる事、かへすく天魔のたくひなり、外道のしわざ也」

「すかしはらかして」は、だまして欲しがらせることであります。

元来仏教は煩惱を断ずる教えであるとみられていたのに、人間である以上煩惱を完全になくすることは不可能であると見極めたところに浄土の教えがあります。つまり人間性を自覚する点に立っているのですが、それと同時に人間性に反することを排斥するのも当然であります。凡人であることを自覚することは、凡人に安住することとは違います。すべて自分も苦しみ、他人を苦しませることは貪りと怒りと愚さによるものであります。こうした煩惱を増長させていて往生を願うことは人間性に反することでありあります。

せめてお念仏を申し、信仰に生きる間だけでも貪り怒り愚かさから解放されねばなりません。これが信仰の生活であります。(村瀬秀雄)

続 三部経の再発見 (2)



須藤隆仙

(函館称名寺執事)

仏像と信仰

つぎに古代インドにはアミダ信仰を立証する物的証拠(絵画や彫刻)がなく、インドに旅行したシナ高僧の記録にもそれが無いから、ミダ信仰はインド古来、仏教古来のものでないといっておりますが、これまた仏教の正しさを知らぬ、たいへんな妄説であります。この件については、すでに竜谷大尊学名譽教授の月輪賢隆博士が中外日報紙上で、詳細な反論を公表しておられるが、さきにも述べた通り、このような説は、だいぶ以前からあったもので、別に珍しいものではないのであります。

前掲の矢吹博士は、明治四十四年、初版『阿弥陀仏の研究』を発刊、その中で「印度の地に未だ曾て阿弥陀仏像を見せずというを以て印度思想にあらずとなすものありと雖も、以て前説(アミダ信仰はインド古来ものとする説)筆者(注)を否定し去るべき有力の証左とすべからず」といい、義浄や慈愍(慧日)の如き、インド旅行僧の伝うるところでは、却ってミダ信仰がインド在来のものであるということが立証される、といっているのであります。

月輪博士はまた、ミダ信仰は「偶像崇拜」ではないから、ミダ像がないから、ミダ信仰はなかった、と見るのは幼稚である、といっているいろいろ学説反論しているのであります(中

外紙)。

私はこの点について、仏教信仰と仏像などの関係、つまり仏教信仰と仏教美術、宗教と芸術の関係、ということに問題をみていきたいと思うのであります。

渡辺博士は「かつて仏教が流行した広い地域で数多くの仏像や浮彫りや壁画が発見され、丹念に研究されているのにもかかわらず、アミダ仏または西方極楽浄土を表現していると断定できるものはただの一点も発見されていないのである」

(大法輪)といい、ためにアミダ信仰は古代のインドになかった、というのですが、素人が聞けばなるほどと思うことでしょう。

ところが実際はどうでしょうか。渡辺氏は仏像や絵画があったから信仰があった、という立場なのですが、芸術史の上からいうと、仏像などの仏教美術が制作されはじめたのは阿育王時代からだそうであります。周知の通り阿育王は釈尊滅後二百年も後の人ですが、この阿育王の頃から、西紀一世紀頃までは建物に装飾として彫刻や絵画が作られたように、実際に釈尊像などが信仰の対象として制作されるようになったのは、一世紀から以後のことだそうであります(佐和隆研著『仏像図典』)。仏教美術の大家小野玄妙博士も、原始仏教では仏像を製作していないといい、インド初期の仏教芸術には仏形像はないといっております(『大乘仏教芸術史の研

究』その他)。そして佐和氏はまた「釈迦像が制作されはじめた頃には過去七仏及び未来仏としての弥勒如来もみられるようになった。それらにつづいて阿弥陀如来も出現し、少々遅れて薬師如来も」出てくるかといっているのであります。

すると、仏像の造形をもって、イコール仏教信仰の進展である、と結論するのは、甚だ当を得ないことになるのであります。渡辺説の形をとれば、釈尊の信仰なども西紀一世紀の頃から起り始めた、ということになり、当初のインド仏教信仰に釈尊信仰はない、などという誠に奇妙なものになってしまふのであります。

このようなわけで、仏教信仰と仏教美術は渡辺氏が考える以上に複雑なものであって、明治の頃すでに矢吹博士がいつている如く、ミダ像がないからミダ信仰はない、などという説は、学論として無意味であり、勿論決定的なものなどではないのであります。(矢吹博士はまた書中「惜むらくは現時にありて工芸上、古代品の徴証極めて稀なり。或は仏陀迦耶の塔を埋め拘尸那城下を灰にしたる異教徒の横暴に見るに、多くは壇滅に帰せしものか。彼のムハムメド・ナリーに発見せられし三尊像は果して阿弥陀観音勢至なるや未だ確証を得ず、但しロルヤンタンガイ及びブダ洞、エルーラ、カンヘンリ、アヂヤンタ、ボロブドール等に発見せられし観音冠

中の仏像は阿弥陀仏たること確實なり。斯くの如くにして印度に既に観音冠中の阿弥陀仏あり、印度西域の地に於いて其の古資料の今後或は発見せらるるものなきを保し難し。仏教美術史上、切に未伝の新発見を俟つ」とも問題を提起している）

インド旅行者のミダ信仰

そしてもっとも問題なことは、渡辺氏が、インドに旅行したシナ僧、法顯、玄奘、義浄、慧日などの記録に、ミダ信仰遺跡の記載がないという、手をたたいて喜んでいることでもあります。

ここにまた渡辺博士の非仏教徒的態度があるのであります。それは仏教を信仰中心、宗教中心に見ずに、単なる学問のように扱おうとする間違いであります。

即ちこれらのシナ僧の記録にそれがない、ということとは学問としてはたしかに一つの興味でしょう。しかし宗教という實際信仰の面ではどうでしょうか。例えば法顯はインドにミダ仏の遺跡がないといって浄土教を否定したでしょうか。玄奘も、義浄も、慧日もミダ信仰を否定したでしょうか。法顯はインドから帰ってのち『大般泥洹經六卷』を訳出しています、その「金剛身品第六」の中で、ある仏の世界を、広博嚴

淨にして「譬、え、ば、西、方、極、樂、國、土、の、如、し、」といっているのです（大正藏經十二卷四P 866）。また玄奘は多くの經を訳して有名ですが、無量壽、無量光壽や極樂國を記した傍明淨土經典を、いくつか訳しているのは、広く知られているところでもあります。義浄またいくつかの傍明淨土經を訳し、とくに竜樹菩薩がサタバカ王に「アミダ仏の如く長壽であれ」と勧めた『竜樹菩薩勸誡王頌』を訳していることは重大であります。渡辺博士は間違つて、美浄が『南海寄歸伝』にアミダ仏のことをいったのは、シナで学び知った知識だと発言して、月輪博士にだいぶ油をしばらくしましたが、義浄が『南海寄歸伝』（インド等滞在の中の見聞記）に記したものは竜樹菩薩の言葉から出たもので、シナの知識ではありません。

もっとも重大なのは慧日の件であつて、渡辺氏は、慧日はわざわざアミダ仏を求めてインドに渡つたのに、現地でそれに接することができなかった、といつて、それこそ鬼の首でもとつたように発言しているのです。ところが慧日は果してインド旅行をしてミダ信仰を断念したでしょうか。あるいはミダ信仰はインド古来のものでないといつて疑問の一つでももつたでしょうか。それどころか彼は、「徧く天竺の三藏に問うに、學者説くところ皆淨土を講ぜざるはなく、悉くいう、この報身を尽して必ず極樂世界に往生することを得

ば、親たり阿弥陀仏に奉事して、快樂安穩なることを得んと。師（慧日のこと）その教を頂受し。ようやく行きて北印度健駄羅国に至る。王城の東北に一大山あり、山に観音の像あり、志誠に祈請すれば必ず驗あり。師すなわち七日參籠し、又次いで断食して畢命を期となし、一心に祈願してその徵驗を待つ。七日に至て夜未だ央ならず、観音空中に現じ：曰く。汝、法を伝えて自利利他せんと欲せば、まさに浄土の法門、諸行に勝過することを知るべし。西方浄土極樂世界は弥陀の仏国なり。勧めて仏を念じ經を誦し、往生を廻願せしめば、彼の国に到り已りて、仏及び我を見て、必ず大利益を得ん、と説きおわって忽ち滅す。師既に断食して身体疲困す。今聖告を聞くに及んで頓に強健を覺ゆ」といったぐあい、インドで観音菩薩からミダ仏を信仰すべしという靈告を受け、不動のミダ信仰を確立したのであります（『慈愍三蔵の事蹟及び其の文集』望月博士・浄土教の研究所収）。それ以来慧日がますますミダ信仰者として精進し、『往生浄土集』などを著し、ついにシナ浄土教慈愍流の祖といわれるようになったのは仏教史の常識であります。

このように、この人達はインドへ行つてミダ信仰を否定したかというに、そうではなく逆に慧日の如く、かえって強く信心を深めてさえいるのであります。

このような信心の事実を無視して、渡辺博士は、インドへ行つた僧が、あたかもミダ信仰に絶望したかの如き表現をしているのは、まことに輕薄なことであります。

慧印三昧經には瓶沙王の第一夫人が浄土に生じアミダ仏を見ると説き、大悲經には北天竺の比丘が西方無量壽国に生じたと記し、大法鼓經には一切世間樂見離車童子はのち比丘となり浄土往生したと説き、文殊師利發願經には文殊師利もミダ仏国を願生したと説き、入楞伽經にはやがて竜樹という者が世に出て浄土往生するだろうと予言し、その他インドにおける浄土願生者のことが、經論などにうかがえるのであります。これらは決して多い数ではありませんが、古代インドにミダ信仰が流布した源泉を予告するものであつて、渡辺氏の如き、インドにミダ信仰絶無説を強弁しようとしても、それは甚だ無理なのであります。

仏大講師 岸 覺勇 著

浄土宗義の研究 第一輯

三重県四日市市六呂見町観音寺中

発行所 記主 禅師 鑽仰 会

振替 名古屋 四〇一 二番

A5版 二九〇頁
定価 四二〇円
送料 七〇円

東南アジア旅行記(2)

佐藤行信

(大正大学講師)

十一月十七日

バンコックで飛行機が遅れ午後五時半頃出発したので、ビルマのラングーンのミンガラドン飛行場に到着したのは、午後六時半であった。日本とは三時間の時差があるから、日本では午後九時半となる。バンコック、ビルマ間の飛行機は、ユニオン・オブ・ビルマ・エアウェイズのDののであった。空港での入国手続は、日本旅行会の橋本さんが一括してやってくれるので、その間我々は空港の土産物店をみたりしていられるから、すこぶる楽である。ビルマはチーク材の産地だけあり、チークで出来てる象の彫刻等を売っていた。

三十分程して橋本さんに案内され外に出ると、ビルマの仏教会の幹部の方々が出迎にみえており、団長の木村先生が、挨拶を述べられた。方々と一緒に記念写真を写してから、車に分乗してホテルに向った。ホテルまで行く間、虫が多いため暑いけど窓をあける事も出来ず、またバンコックと同じ特有な香りにはまいった。だんだんこの香りが体にも、浸み込んできた感じた。

ラングーン滞在中のホテルはインヤレークホテルである。空港から三十分程で到着したが、なかなか豪華なホテルであった。日本にもっていても一流ホテルである。このホテル、ソ連が提供した建物で、ビルマ国家が管

理し、ユダヤ人が支配人をしていてと聞いた。ロビーで部屋を定めて貰った。小生は、鵜飼先生と同室で、部屋に入ったのが、午後八時であった。これから食事である。一休みしてから食堂に行ったが、この食堂なかなか豪華なものであり、食事もなかなかおいしかった。ただし今晚は、あまり団員の方々が食堂に出て来られなかった。あとで聞いた話では、東京からバンコックと急に気候が変化したのと、強行日程の関係で、もう疲れがでて食欲がない方々がおられたそうであった。

しかし、団員の中の最高長老、七十五才の翁久先生が御元気なのは、おどろいた。先生は三十年前仏跡巡拝をなされ、今回が二度目だそうである。現在は富山市に住んでおられ、高志人と云う月刊誌を出版なさっている。戦前、朝日新聞の編集長をなさった方とかお聞きした。このインヤレークホテルは、インヤとは、ビルマ語で大きな湖水と云う意味だそうで、名前のとおり、湖水のわきにある。ここには、二日間滞在するし、洗濯はやって貰えるので大変楽である。夕食をすませて部屋に戻り、風呂に入ってから手紙書きを

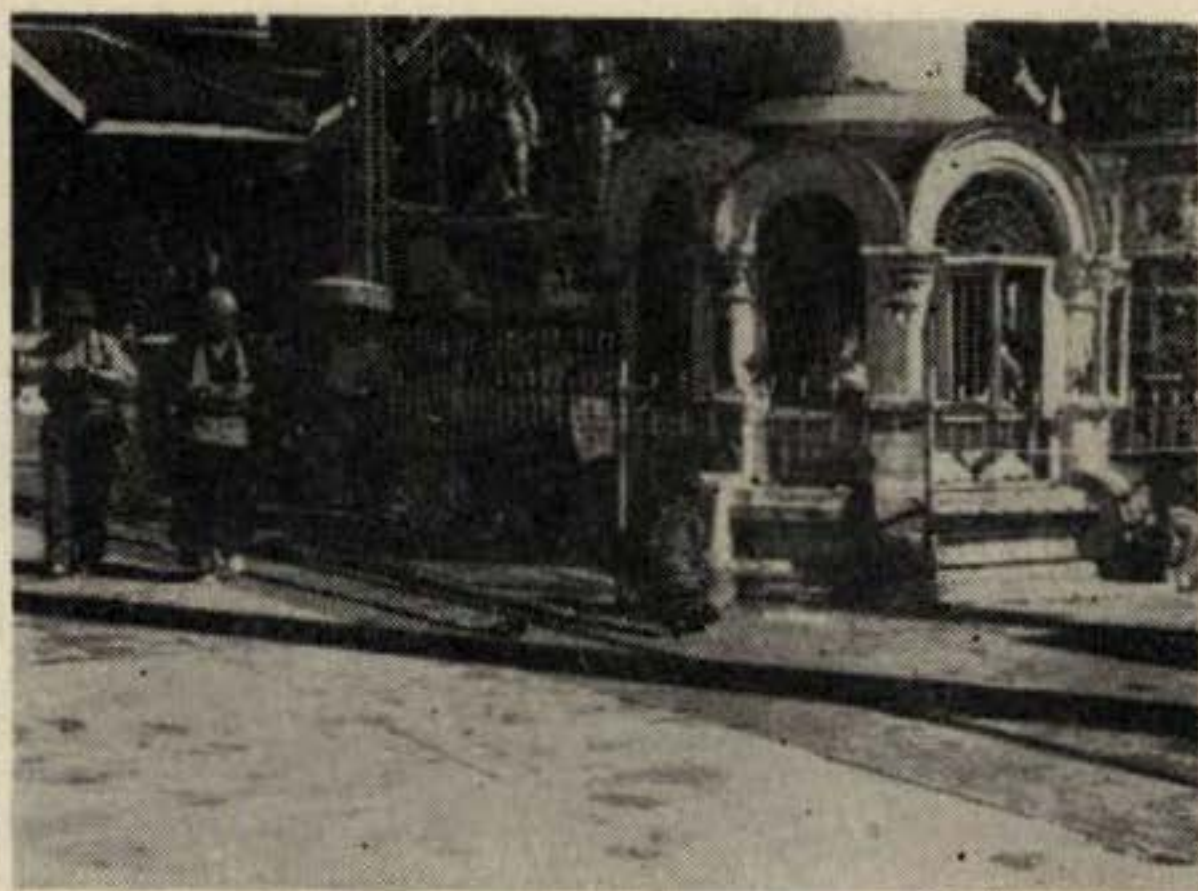
した。用が終りベットに入っただのが午後十一時であった。

十一月十八日

朝七時に起床した。このホテルは冷房がよくきいており、快適に眠ることが出来た。同室の鵜飼先生は、もう起きて、窓から湖水の風景を写真機におさめておられた。外はかなりの暑さであろうが、快適な部屋の中からこの美しい湖水を眺めていると、すがすがしく気持ちがいい。又、南国の空は誠に澄みきった感じだ。顔を洗い洋服を着替えて七時半に食堂に行った。昨晚は皆さんゆっくり休養なさったせい、すがすがしい顔をしておられた。

食事中、本日、ラングーン見物をする時のガイドを紹介された。我々のガイドは、ビルマ人を父に持ち、日本人を母に持つ、キンキヌー（日本名、門せつ子）と云う御婦人であった。東京、中野の小学校を卒業しているだけあり、りっぱな日本語を話す人であった。あとで聞いた話であるが、この方は、ラングーン在住の日本人（百六十人位いる）には

ビルマ語を、ビルマ人には、日本語を教えているそうだ。恐らく年令は三十才位の御婦人である。ビルマの御婦人は、皆ロンジーを腰



（シウエ・ダゴン・パゴダ）

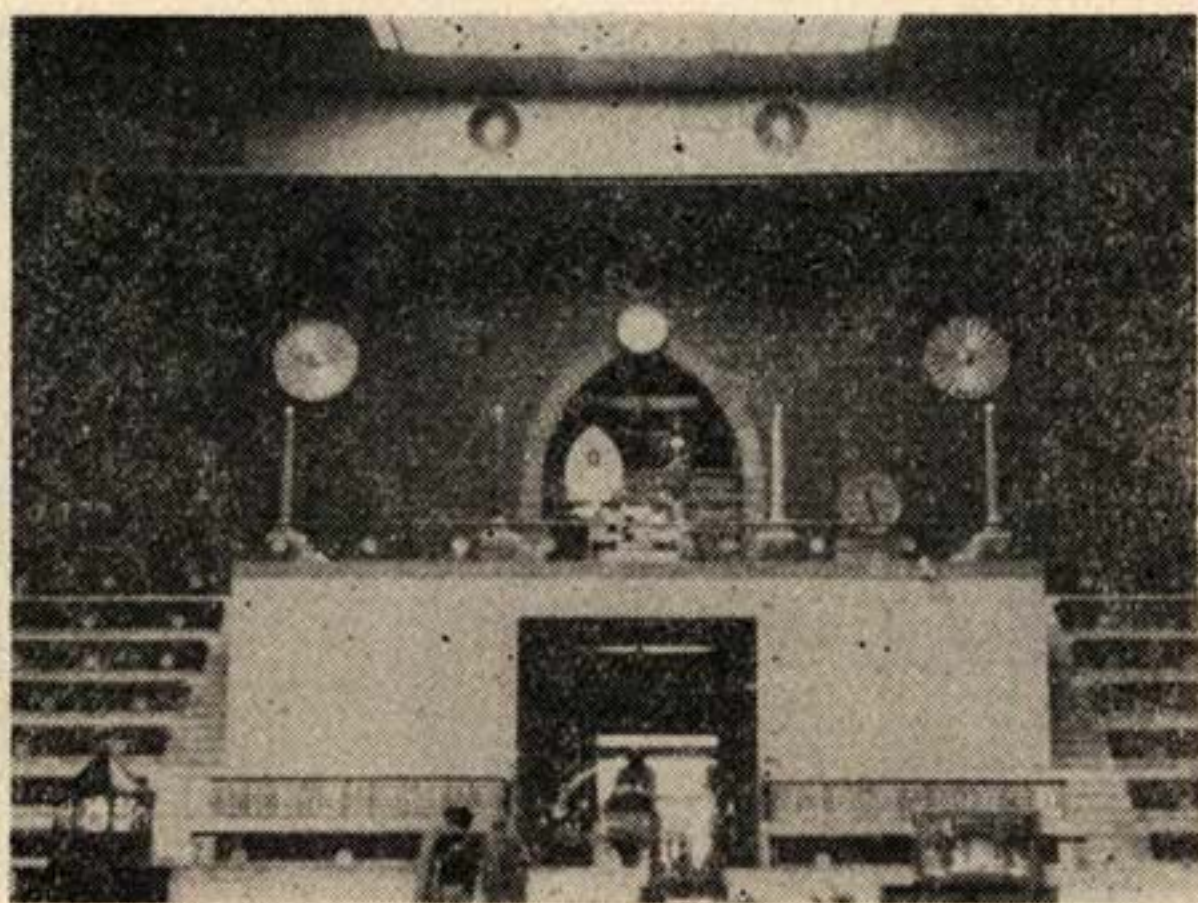
に巻いている。この姿は印象的である。食後、朝九時にホテルを出発して本日の観光がはじまる。外に出るとさすがに暑い、ただし

昨晚とちがい昼間は虫がすくないのは助かる。

最初に訪れるのが、仏教国ビルマのシンボル、シウエ・ダゴン・パゴダである。途中、車の中より、黄衣をまとった僧が鉢を持って托鉢に歩いている風景をよくみかけた。しかし暑いので衣を頭までかぶっている僧もいた。女の人には、日傘をさしている人がいる。恐らく傘は日本製だろう。そうこう眺めているうちに、シウエ・ダゴン・パゴダに到着した。このパゴダ（仏塔）は、ビルマ最大のもので、誠に壮麗なパゴダであった。この黄金にかがやくパゴダ。なんと南国の空に映るのであろう。説明によると、このパゴダ、紀元前五八五年に建てられた時には、高さ二十七フィートであったものが、十五世紀の頃、ベグーの女王、シンサウブによって、今日のような三百二十六フィートの高さをもった華やかな、黄金大仏塔に作られたと説明された。このパゴダの正面入口には、巨大なこま犬が安置されており、この石段の下で靴をぬぎ、勿論靴下までとり参詣する。正面入口より、パゴダまではエレベーターがある。別に歩い

て登る道もあるが、我々は時間の関係でエレベーターで登った。このバゴダの周囲に、小さいバゴダが多数あり、また石彫や木彫のすぐれた仏像の安置された御堂等があり、その美しさは想像以上であった。この小さいバゴダ等は、後に寄進されたものだそうだ。これらの周りは、大理石がひいてあり、周りを参詣するのに約一時間かかる。途中僧が坐禅している姿もみた。まだ朝の九時半と云っても、南国の強い日射し、大理石が焼けて足の裏が暑くてたまらず、時々御堂に入っては、休んだ。ビルマ人は、朝五時頃まだ大理石が冷えておる間に参詣するそうだ。しかし石彫の仏像も白毫がダイヤモンドであつたりして、その豪華さにはおどろいた。約一時間かかってバゴダを参詣し、その後我々は、バゴダから車で三分位のところにある放生池を見物した。何んと云う名の魚か知らぬが、無数にいる魚は餌をやると、ものすごいいきおいで浮んで来る。説明によると、これは結婚式のとき結婚する男女が、二人の年の数だけ放魚するそうであるから、大変な数になる訳である。

それからラングーンの町を車の中から見物した。ここでもタイで思ったと同じで、歩いている人々が、なんと日本人に似ているので



(ワイルドピースバゴダ)

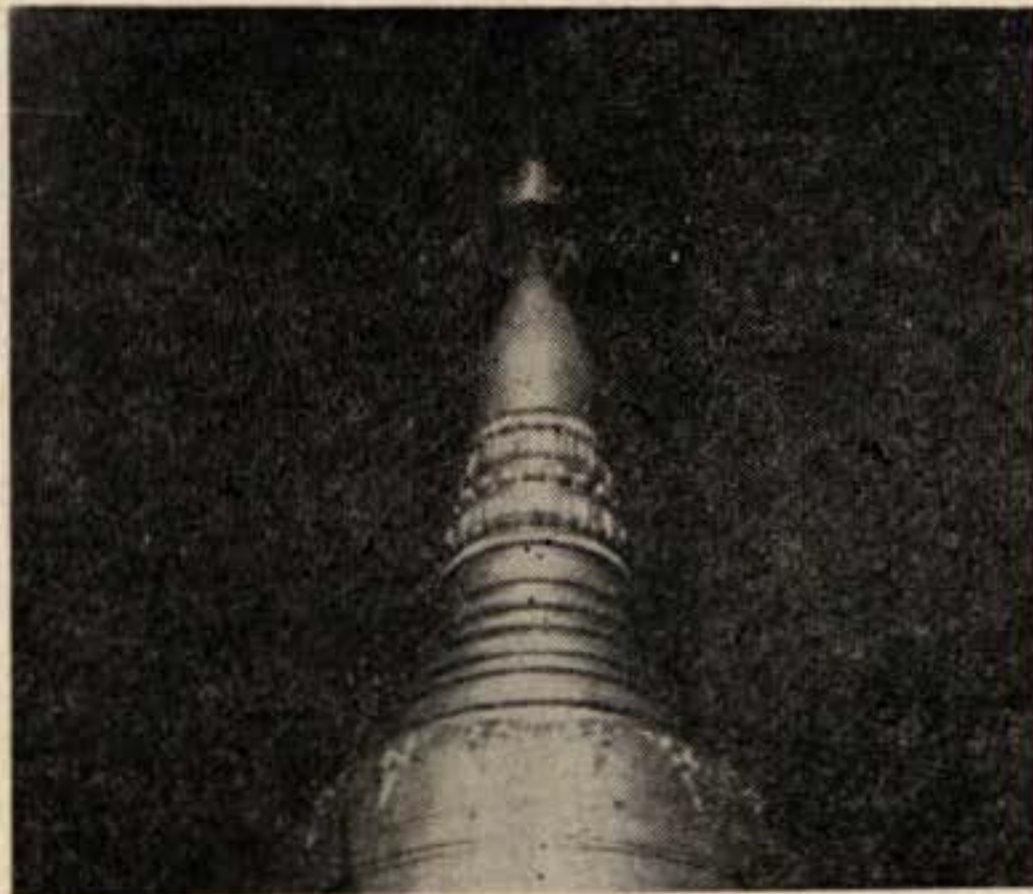
あろうと云うことである。車の中で聞いた話したと、ビルマは、人口二千三十万、ビルマ人はいろいろな人種から構成されていて、そ

の中、ビルマ族が六十五%で、残りが、カレン族、シャン族、チン族、カチン族だそうである。外国人では、インド人が一番多く、百二十万人おり、次は中国人の三十六万だそうである。このインド人が、ビルマでは経済的な実権をもっており、華僑は、港の近くにいて、東南アジアの他の都市ほどの経済的勢力はないそうである。町のレストラン等でもインド人の経営が多いそうである。なお、日本の自動車も輸出されているようで、トヨタ、プリンス等の車をみかける。又、丁度映画館の前をとった時、日本映画が上映されていた。しかし町そのものは、タイのバンコックの方が整理されているように思った。それから我々は、元首相のウ・ヌーが建てたワイルド・ピースバゴダに向った。このワイルド・ピース・バゴダは、新しいものであるし、この程度のバゴダは日本でもみられるため、先ほどみた程の感激はあまりなかった。しかし首相みずからバゴダを建てられる仏教信仰の深さには敬服した。そのバゴダのすぐ前に、世界仏教徒会議をやった会場がある。二千人程度収容出来るそうであるが、さすが

りっぱなものである。その中に日本から寄附された仏像が安置されている。この仏像は、アジア善隣協会が友好のため寄附したものであるが、この仏像をビルマに送る時、鎌倉の自坊の仏前において開眼式をやったもので、誠になつかしく、親しみをもって参詣した。

その近くに、ビルマ仏教会所有の、各国から来る仏教徒を泊める宿泊所や、仏教会にタイから寄附された建物及び仏教図書館がある。これは、なかなかりっぱな図書館で、仏教関係の蔵書が非常に豊富であった。団員の一人竜谷大学の武内紹晃先生と、時間の制限がなければ、ここはゆっくりみせて貰いたいところだがと互いに話しあった。本日の昼食は、ビルマ仏教会の招待で御馳走になることになっている。それで、仏教会の会館に案内された。そこでビルマの高僧の方々とお会いし、団長の木村先生より挨拶を述べられ、又、日本から持って来た薬品等を高僧の手から、ビルマの恵まれぬ人々に送っていただく事をお願いした。

なものであったが、油であげたものは、おいしくいただいたが、スープ類になると、タイ以来鼻につく特殊な香りでもとても飲めず、かわりに、喉がかわいたため、お茶ばかりを飲んでいった。食事中感じたことであるが、ビルマの米は、バサバサである。それから、申し遅れたが、高僧方は、十二時を過ぎているから前に召し上ったのであろう。食事の場所に



(シウニグゴンパゴダ夜景)

は出て来られなかった。食後は、また別の場所では仏教会の幹部の方々にお茶とケーキの接待をうけた。ここで思ったのであるが、ビルマの仏教を盛んにするのは、高僧方は勿論であるが、この信者の方々の力であると思つた。ビルマの僧侶は、地位も高く修行に専心出来る点、恵まれていると思つた。これは、南方仏教に共通する点であらう。色々な御接待をうけ、ホテルに帰ったのが午後四時、今晩は六時から日本大使館の方が、町のレストランに招待して下さる事になっている。それまで、風呂に入ったり、すこし休養をとることにした。夜レストランに行くため車で町に出る途中、パゴダに電気がついて夜空に輝く姿がまことに美しかった。行った先は印度人経営の中華料理屋であったが、ここの中華料理は大変おいしかった。ビルマ仏教会の会長の息子さんもみえており、なごやかに会食をした。夜は御婦人は外出されないらしく、町でもみかけなかったし、レストランにも女のお客さんは一人もいなかった。楽しく御馳走になりホテルに帰ったのが夜十時頃であった。明日は、いよいよ印度に向って出発である。

小林 瑞 浄 先 生

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

小林瑞浄先生とこう申しあげたほうがわたくしにはふさわしいのである。小林瑞浄先生はわたしの中学校時代の校長で入学してから三年間、この先生に授業をうけたのである。

それも修身である。当時の東山中学校は野球が強くなって甲子園にも二度出場しているのであるが、この校長先生は凡そ野球などなんのことだかチンプンカンブンであるのにスポーツだけはこの学校が宗立学校として秀れているのである。

野球、それに庭球、それから相撲、それに

剣道と当時すなわち大正から昭和にかけて、全国制覇をしたこともあったのであるが、その校風に似ずこの校長先生は紋付袴で、その上短靴を履いたまことに明治は遠くなりにけりのスタイルで登校なさるのである。

この小林先生は後に仏教専門学校の校長になって今日の教大学の基礎をつくられたのではあるが、その服装だけは洋服流行時代の昭和のはじめに紋付に黒の靴というまるでドンキホーテ・スタイルであったのが面白いのである。

この小林先生は浄土宗の学階の最高たる勧学に叙任されたが、なんといっても宗学の権威者であったけれど、残念ながらわれわれ中学生にはこの先生のうんちくある講義を馬の耳に風と聞き流すしか仕方なかったのである。

この先生の講義は全く自由に睡眠出来るカルモチン講義であって、目を白黒にむきながら人を對手とせず、黄色いカン高い声をはりあげて、わかるうが、わかるまいが、独りで喋られるのである。中学生のこの頃は小林先生のエラさなどなんにも知らなかったが、やがて社会に出て、中外日報に入社してから、なるほど小林先生の講義が如何に内容の豊富なものであったかを知ったのであって、耳の遠いこの先生を随分苦しめたものなのである。

たしか修身の授業中のことであつた。

横着もののわたしは相変らずこの先生の講義を聞かないで、本を机の前に立てて居ねむりをしたのである。

もちろんわたしだけでなかったので、凡そクラス五十人の生徒のなかで点取虫といわれる、勉強組は別として、ほとんどのものが眠る慣習であったから、みんなおとなしく眠ったのである。そこでいつものように眠っていると、どうしたことでだろうか、教壇から一步も歩いたことのないこの小林先生が、静かに教室の机の所のなかに足をのばされたのである。

もちろん睡眠組はそんなことなど知る由もなく、すやすやと夢をみていたのである。

なんのことはない。そのときに小林先生はわたしのそばに近寄ってきて、とつぜん背なかをスコシク叩かれたのである。おどろいたのは、このわたしで、ハッとして目をさまして、誰かしらと顔をみあげると、なんと目を白くむいた小林校長先生が横に立っているのである。

あわてて早速、身体をまっすぐにして、黒板の方をみると、この小林先生が静かな口調で、こういうのである。

「どこか身体の具合が悪いのか、腹でもいたいのか」

と親切なことばで肩を叩いたのである。

仕方がないから、ええ、ままよというわけで、

「ハイ」

と答えたのである。

ところが、そのあとの先生のことばがまたふるっているのである。

「それなら授業は出席にしておくからかえって休みたまえ」

とわたしの腕をとってかえることをすすめたのである。

ハイといった手前仕方がないので、わたしはしぶしぶ席を立つと、クラスの隅から、

「オーイ、うまいこというな、ほんとか」

と声がかかったので、みんなドット笑ったのであるが、その本人のわたしはそーっと立って教室を出たが、もちろんかえるわけにはいかず、校内をウロウロしながらこの修身の時間のすむのを待ったのである。

実に先生のまじめさにはさすがの横着者のわたしも頭がさがるのであって、中外日報に入社してからもいつもわたしを励ましてくださったのがこの先生であって、一度中学時代の仮病のおわびをいいたいと思いつながらそれを果たさずに終ったのが残念である。

お会いする度に目を白黒させながら「頑張るんだ」と激励のことばをかけてもらったのがこの先生であるが、全く一生を通じて世話になり放しの先生であった。

まろい石

合田 徴雪

びしています」

「とんでもございません。亡くなった私の母の愛情は、慈悲心というのですか、表面ももっともと厳しうございました」

かくてそのお手伝いさんは昨秋、夫人の実娘の様な形で良縁に結ばれ、新築スイートホームも建ち、今春はもうお腹にお目出度のきざしにさえ恵まれている。

○

手水鉢の水を使いながら、ふと下を見ると、羊歯に囲まれた吸込みの中に、まろい可愛い玉子大の小石が、幾つも仲良く重なり合い、いま流したばかりの水を浴び、美しくうるおっている。

大河の流れに、永年かけて互いにもまれ、磨きみがかれ合ってきた事が、容易にうなずかれる。

○

某夫人と、そのお手伝いさんとの対話。

「奥様を世間では封建的な人間と、同一視している様ですわ」

「しかたがありません。生みの子を育てた経験も無し、いたらぬ処だらけでしょうと、いつもあなたに、心の中でおわ

夫人の夫君は裸一貫から県下に十指に余るスーパーマーケットを持ち、また一方某製品の日本一卸売実績を年々獲得し、数々の感謝状や記念品が事務室の欄間に、ズラリと並んでいる。

今春も輸送部に白い手のアルバイト大学生を採用したが、大成した人柄の殆どが、一度はこうした貴重な労働体験を経ている。

然しそうした中であって、若い者に対し深い思いやりを示した夫君の子息（副社長）の美しい情のボタンは、また次の後継者の魂の中に、花咲き続ける事であろう。

夫人が某外地埠頭に十一個の荷物をチャッキで預けて帰国しようとした時終戦詔勅が降った為に、荷物を持てるだけ持って帰国した終戦後の引揚者よりも気の毒だった。また夫君は

夫君で、南方従軍後生死不明。戦後市葬宅葬も済ませて忘れた頃突然拙宅の玄関に、幽霊ならぬ両足揃ったボロ軍服姿を現し、ただ二枚の私所持の服地で、貧しい二人が揃いの背広服を新調したが、人間誠実一筋に生きれば、道は自ずと開けるものである。

○

引揚者といえ、やはり終戦後間もなく「僕を養って下さい」と拙宅にこれもボロ服姿を現した時には、もう途中列車内で就職契約済。翌朝未明に起き次駅勤務所到着が午前六時、歯刷牙をくわえて出てきた小使に会釈し、曾ての自家用車族がはやそここの清掃を始めた。まだ物資欠乏甚しく、私達は粥をすすり彼に銀メシ（白米飯）弁当を持たせたが、最初彼の仕事は現場監督。某日山から船へ積荷作業中豪雨「監督さん中止しましょう」に対し「じゃおれ一人で」と自ら始めたので一同彼に続き無事完了。かくて二ヶ月後には支配人拝命。その時彼は悪びれず独立したいと申出た。すると社長は「一寸待って」と鍬を担いで裏庭へ。花咲爺もどきに畑を堀り現金を取出し「資金の一部にどうぞ」

彼が独立事業を始めたのが何と空地の只中。が今やそこが市の「新天地」と名づくる豪華地域となった。

別に彼の夫人・子息・姑・夫人の実兄達も台湾から引揚げ

てきたが、夫人の扮装たるや男物背広服に中折帽子と折曲げネクタイをあしらひ婦人帽に見せてかぶっていた。「万が一人夫が生きていたら役立とう」といういぢらしい心根に泣けた。

戦地にあつて猿族の如く笑う事を忘れ、幾度も生死の境を往復したゾツとする話を、宛らお伽噺でもする様に、穏かな微笑をたたえて語る彼等に、教えられるものがあつた。

○

某青年は工業高校卒の身で、優秀大学卒でさえむずかしいとされている某有名会社に、是非就職し度いという。そこで私は左の紹介状を書いた。「世の信頼を得て大成された経営者のお心を思い精励すると、当人申します」そしてそれを彼に示すと、青年は真剣な瞳を輝かせて答えた「きつと実行します」

念願叶つて入社出来た彼は、早や次の月から遙か故郷の両親の許に仕送りを続けているし、その翌年の春にも彼の出身校の後輩がまた一名採用されたという。私は、会社側からも勤務者の心が充分、汲まれていると見た。

某市庁に奉職している彼の実兄達は「私が市長でしたらこうします」と慎しく且堂々とベースアップを要求し、これまた素直に受入れられたと、昨日の新聞が報道している。

○
もともと芸術家志望の身が思う処あって未経験の事業を次々と始めて玄人跣足故世人は首を傾げるが「芸術に打込む情熱を以てすれば」と聞いて、成る程と合点もゆく。それにしても嬉しいのは、常に相手方の為になる様力をそそぎ、己は二の次である。普通の商法から見れば逆だが、それも新しい一つの生き方だ。「相手の為になる様」とは「ただ相手から喜ばれよう気に入られよう」というのではない。いわば「本当の肉親の愛情の如きもの」と称すべきか。

○
芸術家といえ、行動美術の田中稔之君の作品は、美術雑誌の口絵や批評にも数多く取上げられ、私の目に触れただけでも十五冊に及んでいる。また君の大作が某市会議事堂の壁面を飾っているが、最初低い位置にあったのを誰かが市長にその事を知らせると、直ちに高い文化都市に恥ぢぬ場所に変更された。鮮かな処置振りは流石名市長である。

田中君は昨年六月からパリにあり。単なる箔付けに非ず、ちっくり修業の覚悟である。

○
列車内で歎異抄を熱心に読みふけている青年を発見、身の上話を聴いた。彼は十九の時から十一年間入院生活を過

し、その間枕を並べていた父君の死水を取り、また時々病院を脱出して軽自動車の運転実力をも身につけ、退院翌日から「曾て胸を患った事あり」と就職、某寺の小僧である実弟に某仏教大学に入学させたにも関らず、弟君は「自力で生きた」と寺も学校も捨てて行方不明。その様な事で当人は再び療養所へ。手術も半年後体の抵抗力が出来てからという容態にある。

一日私は果物籠と若杉慧著「野の仏」と提げて彼を慰問した処、その瞳が驚歎に価する程明るい。そしていう。「たった一冊の読書を赦されて孤島に追放される運命にあったとしたら、歎異抄を」と。本誌の読者にもそれぞれその熱愛書があるろう。

○
帰途列車中に黒のセーター黒のズボンという、タイツ姿の男子パレリーナかと思われる青い目の紳士がいて、見れば片方の手の指が足りない。「学生時代アルバイトで負傷して」という。其瞳も涼やかなのも当然、氏はカソリック教会の神父であつた。

○
某青年は今、息を引取ろうとしている。が彼の両親は悲痛の余りただおろおろするばかり。その時私の母が彼の両手を合せて上げながらその耳に口をあてていった。「父母の恩は

有難いと、いつもあなたはいつてらした。あの世での父母は阿弥陀様ですわね」すると青年は苦しい呼吸の下から明瞭りと答えた。「ご安心下さい。その事は常日頃から修養して心得ています。皆様ごきげんよう。南無阿弥陀仏」かくて安らかに極楽浄土へと、旅立った。

彼は生前ながい間拙宅で療養生活をしていたが、手すさびの見事な半紙のこより製シガレットケース等を、今も私は大切に保存している。やがて来る日を覚悟して作られた遺品であつたのかと、涙新たなものを覚える。

○
心優しい妻に先立たれた某氏と遺児に差延べられた婦入団体や近隣の人々の愛の手が、どうも遠慮勝である。氏がスポーツマンタイプの好男子であるだけに無理もない。

が、葬儀の席上では目立たぬ存在ながら、其後何くれとなく人知れずズーツと面倒をみ続けている某婦人一家の勇気を尊しとしたい。

○
「お互いは大空の様に」と記された白襦をかけ、愛のマンダリンを奏でながら日本全国津々浦々を、不幸な人々恵まれぬ児童達を慰め励ましてさすらう大空詩人。人呼んで「今良寛様」とも。

曾て某養護施設に捧げた拙作詞並曲の歌「よい事ばかり考えよう」をもその行く先々でひろめられているそうで、その普及振りも嬉しく、詩人が啄木の東北地方浜民村の幼稚園訪問の際「大空先生いい歌を聞かせましょう」と可愛い声で始まったのも、氏が今から教えようとされた右の歌であつたという。

今一身体傷害者青年小川安夫君。君は学生時代登山で遭難し、言語も歩行もはかばかしく無い。にも関らず利かぬ手に楽器代りの「ニコニコ笑って」と記されたフライパンを叩き、大空詩人同様の行脚を続けているが、武者小路氏に愛され「安夫君に寄せて 竜々なれ雲おのづと来る 実篤」という書も所持している。君の詩を一つ。「野の仏の合掌に見おくられて峠越える」

○
土門拳写真集「筑豊の子どもたち」にも紹介された日本の日蔭、田川市の某校では「貧しくとも夢失わず」と題する心優しい愛情詩集が出版され、また同市内他校々庭には「勇気を持って小さな事にも。それが世の中を住み良くする」と強く太字に刻まれた石碑が建った。
共に銘すべきことだと思ふ。

風雅に生きた人

足利義政

林 左馬衛

(宮内庁・図書寮)

からの彼の長い人生を通じて、院の面影が脳裡を去らないのに徴して（いまましいことの一つには違いないが）明らかであるように思われた。

義政は、自分の誕生祝に後崇光院から遣られた宝剣を、大切にしていた。それは、錦の革袋に納められていて、おっとりとした鈍い光を放つ、上品な中にも可憐な味わいのある、剣であった。氣にいつていたけれども、その剣からふと感じられてくる迫氣に、ふと後崇光院をみる思いがすることがある。それが、若干、わずらわしくもあった。

院は、祖父鹿苑院の人柄と時代を、身をもって知っておられる、かけがえない長老であられた。叔父の勝定院が、その人柄のよさも手伝って、すっかり院に傾倒していたこともあって、父普広院と院とは、ともすれば、意志の疎通を欠いておられるような感があった。院が依然として重い存在であられたのであり、かりそめにも軽くみなし奉ったことのないものであろうことは、自分の血の感性のすべてに誓って疑いのないところであった、と思われる。

足利幕府と、伏見宮つまりたつとき皇統をふまれたあたりとの御交誼は、すべて後崇光院と室町家代々の当主との、深い御縁によるものであった。それぞれの時代がそれぞれの立場から後崇光院をお見守り申し上げたのは、当然であったが、後崇光院におかせられずには、その必然的ななりゆきが、ずい分御不審にわたらせられることもおありであったように、おみうけできるむきもあった。

後崇光院が、父や自分をみられる折の規準に、祖父と叔父のありし日の姿がひそんでいく。その、祖父にも叔父にもあったこととてない自分が、ともすれば、後崇光院の深いまなざしにひるんでしまった記憶があるのが、義政にとって、堪えがたいことがある。それが、年上にわたらせられる後花園院に対し奉っても、年下にわたらせられ心から自分に頼りきられた後土御門天皇に対し奉っても、必要以上にかたくなに対峙し奉らなければならなかった、なによりも大きい素因になつていくことを、誰よりもよく自分が知っている。義政は思っていた。あるいは、そうかたくなにあることが、皇室に対し奉る自分の唯

一のあかしであるような気も、時々することがある。深い好誼、その果には、伏見宮家と足利家の二つがかかりきってきずいた、日本文化の真の意味をとわなければならない、悲願にも似たきびしい現実がある。

遁世の志をふかめた義政は、その余生を、鹿苑院の示し残された風流の道に対決してみたい高雅な欲求のために捧げようと思った。応仁の乱の政治的なしめくりもさることながら、血の短命なことにつながる責任感が、より大きく、この道への悲願につながってしまった。——それは、後崇光院を媒介に、自分に迫ってくる、祖父鹿苑院の要請であるように思われてならない。

花の御所そして北山殿にわたる祖父の風流生活の太い骨格は、今日に及ぶ室町文化の中に生きつづけているが、応仁の大乱を経た今日、なにかそれだけにすがっていることを許されない、色あせた半面を露呈しているかに思われないむきもない。思えば、祖父から叔父へ、叔父から父へと移り過ぎた、動かぬ風流の遊びの中にも、次第にといつめられて窮屈な規格をあらわにしているなにかがある。

——義政にしてみると、それをといつめて来られた後崇光院の贖が、堪え難かったのだ。

義政は、武家の血の本質に還って、ある面で公卿社会人に寄生され汚されきった、古い足利氏の家礼の真価を明確にしてみたいと念願した。祖父の文化も、もともとは、小笠原長秀らとの協同調査による、武家礼法の規準を公のものとしたことに端を発していたのだ。すべてはその上にひらいた、空しい花のような文化であった。公卿たちがその花をもちより、ある時は、規準をといつめてつづいた三代にわたる風流の残滓に、自分は訣別して、もっと純粋な風流を打ち出したい。古い公卿たちがそれについて来れるか——、自分は、それに、すべてを賭けなければならないのだ。

眼にみえぬ後崇光院の凝視をそらすために、義政は、舞台を東山の山麓に移そうとしていた。後崇光院がみとめられたものは、室町及び北山においての足利文化であったにすぎない。あくまでもそこにお招き申し上げたお客様であられたのだから、必ずしもすべてをお目にかけたということにはなっていない

のである。それに、金閣にしても、宇治七園にしても、祖父の業績の影には、場面の移転という事業があったのだ。

義政の脳裡には、すでに、持仏堂のあらましの外に、このましい観音堂のたたずまいや、それを背景にやがて展開されるであろう新しい文化生活の幾場面かが、思いうかべられていた。可憐なものを上品に弄ぶにふさわしい、この静かな環境が、一切の旧文化に優位し、心ない避地の人々からもむかえられ、心の憩いを求めるにふさわしい場所として評価されてゆくであろうことを、義政は、願わずにいられなかった。

父の時代からの同朋春鷗齊能阿が、かの後小松院の皇子一休宗純禪師に参禅して印可を得たという奈良の村田珠光を伴ってあらわれたのは、そうしたある一日に黄昏せまる時分柄であつたらうか。

「浄土」編集部では「お盆特集号」を企画して居ります。お盆の施本用として御利用下さる様、御案内申し上げます。

生活の一片



誠 演 羽 丹

(福岡・正法寺住職)

法然上人は現世をすべき様は念仏の申されるように生活すべきであると申された。念仏申されるような生活、このような生活はなかなか私達の生活には思いこそすれ、程遠く感じられてならない。念仏申すことの中にも生活の悩みが絶えず入って来て、種々な形相で私達の心を念仏生活から引離そうとするのである。誠実に生き抜くことの争いが体験として私の心に刻込まれて行く。他人から見ると平凡なことも、迷信的なことも、又考えていることの思いが、そのまま夢として出現する現象、これらは皆、私的な公開すべきことではないかも知れない。然し、このことによって、現実により一步正信への道が展開すれば、ありのままに判断すれば、心の一步前進であり、信仰の深さを伴うと考えてもよいのではないかと思うのである。体験は私の恥の過去を綴るものでありましょう。従って主観的なものであるから分別するのに、充分の注意が大切と思うのである。

土工さんの一灯

私の住する寺がF市の郊外として住宅に農地が転用されてくるので、農地の間にある墓地を改葬して納骨堂を建設することを提案した。檀信徒も墓地の尊厳を害するとして大賛成、早速、その工事に着手した。

予定地を寺の裏の墓地と言うことにし、一月から墓地の改葬にかかった。一軒一軒、一基一基、掘って行くのは思いの外手がかかったが一応終了し、いよいよ納骨堂の基礎に取りかかった。何分墓地のことなので私も改葬前に、七日間墓地を経を誦して廻り、土工さんに、三界万靈有縁無縁の塔を朝夕、合掌して工事に着手することを依頼したのである。墓は血に連なる関係があるので粗末にする和種々の問題を引起すからである。

土工さんは朝夕、始めは何気なく、合掌をしていたが、工事がすすむにつれて、改葬に残った遺骸がぼつぼつと土の中に出て来たのである、困ったのは土工さん、現実には真面すればする程、目に見えて、塔に対する合掌の相が敬謙になって来たのである。その心がい

つ知れず、他の工事にも関連して、誰一人の怪俄人もなく順調にすすみ八月の盆まで工事が完了したのである。落成法要の時、私はこのことを檀信徒に披露すると共に、納骨堂の誇りとしてより以上の喜びを以って信仰の道に入ることをすすめたのである。

これは唯平凡なことである。然し万一これが逆に、怪俄人が出来れば一体如何に一般人は考えるであろうか、墓を扱ったあたりであると言うに違いない。

現実には土工さんの誠実な合掌の心がすべての他の工事に波及する無尽の尊さを私は思うと共に、檀信徒の納骨堂に対する喜びの協力が影の力として讃えるものである。

三百年の仏顔

久方振りに師僧寺に帰ったので、一家会食することになった。小学校の教師をしている弟子が、昨秋知恩院の加工道場に入行したので、お祝と感想を聞いたのである。

弟子は大学を卒業し、特別講座を受講し三年かがりの加行受行である。加行道場とは一般に浄土宗の坊さんとして資格を頂くの

に、廿日間修行し、宗祖から伝わる伝法や、念仏の行儀を教わるのである。従って、仏教関係の大学に学んでない弟子が、どの様に感受したか、知りたかったのである。

本来誠実な性格であるので、誠実に加行を受けたのは分かるが、余り感銘を受けなかつたとのことである。熱心に修したために神経症になって医師を呼んだことなど話していた。然し、日課に就いて余り感心してない趣きである。時代は変わったとは云え、三週間の道場に、こんなにも加行の日課に耐え難いのであるかを知って聊か落胆もしたが、考えさせられることもあり、次の様な体験を語らなければならなかった。

それは丁度、元祖法然上人の七百五十年の遠忌の年、十二月、遠忌にも参拝出来なかつたので、せめて、報恩謝徳のために、爾書道場に受行したのである。七日間の期間、勿論頭を剃り、白衣黒衣、如法衣と言う僧の姿、加行道場と同じく門外不出、日課に従って行動するのである。大体、坊さんの修行とは、自由にまかせる法と、日課に追い廻される法即前者は自発を主として、後者は他動的にす

るのである。内容は、さんげと讃歎である。従って時には怠惰する、平凡なものである。然し、一般の人は修行と言えば寝食を忘れて行ずると考えているが、考え様である。

私は日頃の生活は、寺務と保育園、その他



(納骨堂)

公務で殆ど一日中動いているので、じっとした日は珍らしい。幸いに、一切の日頃の環境生活から離れて、知恩院の中の生活でもあり、精神的な転換として、只管、念仏行に励むべく思っていたのである。処が、一日二日

と過ぎても、なかなか心落ちつかず、正に散

乱心のみ多く、至心に念仏修行が出来ないのである。丁度、三日目の夕食後入浴し、集会

堂に於て礼拝をしている時である。私は私の心の乱れを押えて、じっと本尊仏を拝してい

たのである。すると、頭の中に、こんなことが浮んで来た。私は今この本尊前で礼拝して

いる、これは事実である。されば、この本尊前で私と同じく現在幾人の人が礼拝してい

る。どの様な心であろう。現在のみではない、過去に於いて、七百五十年、否三百年の

昔から今日まで、私と同じ相で、高僧先徳も、ここでどの様な心で礼拝していたであろ

うか。知っているのは、本尊仏のみである。恥かしいながら、教え給えと仏を礼拝したの

である。すると、急に、私の耳に他の礼拝の音が聞えなくなったと共に、本尊仏の目に涙

が浮かんだ、すると、私の廻り、否、部屋の隅々、幾重ともなく、僧行の相をした坊さん

が、しっかりしなさい。私達がついて……と言う言葉が聞えて来たのである。

私ははっとした。私自身生きているのでなく、及び先徳が育て護りの中に私が生かさ

れているのである……

こう感じると私の身体は何かしびれた如くじーんとなったのである。

ふと、本尊仏の御顔を仰ぎ見ると御顔は微笑をたたえる如く感じられたのである、と共に

に今までの散乱心は、すーと消えて、只管、清らかな心が湧いてくるのを覚えたのであ

る。私にはあとの三日は法悦の中に過ぎたのである。

平凡な日課の中にも、私はこの様な体験をした。如何様にも考えられる。然しすべて宗教的な修行の場は、平凡であるが、自ら求め

るものがなくては、真に得べきものがないのを弟子に知らせてやりたかった。宗教的な

訓練は日頃積むべきであり、それが突然に現われるので奇蹟と言うかも知れない、然しこ

れは奇蹟ではなくして、ありのままに、自己の心の過程に於いて生じるものである。弟弟子は黙っていた。幼少にして、両親を失い、

祖母の下で育ち、小学二年の折、出家し、今日まで寺に育った。そして加行を受行したのである。彼の顔はいいしれぬ苦痛と共に発奮

の意が浮んでいた。

夢問答

私は病身だったので、友人は会うと必ず、

元気かね、身体はどうか、と言って呉れる。有難いことである。そこで、奇蹟的な体験を書けと言う有難くない題名まで頂戴する。

病身なるが故に信仰が必要だ、元気なれば

信仰はいらないかなど、学生時代によく考えたが、然し、病身なるが故に、いろいろな体験も味はして頂くのである。病氣との闘争は

とりもなおさず、仏への心の争いであるからである。私は療養中よく迷うとこの様なことをするのである。

× × ×

学生時代のことである。盲腸を患った、切

る時機を逸した。時正に昭和十八年十二月八日、誰も日本人として忘れることの出来ない

日である。従って盲腸の痛みの苦しさと、戦争への若人の熱情とは二重に苦しかった。更にその日から卒業の試験と全く三重苦、友人

達は、私は残して、夫々の道に巣立っていった。然し私はどうしたことか一向に盲腸が小さくならない。京都を無理に出立し、九州に

帰ったのは翌年の八月である。切るに切られず、手で押えると小さく残っている……そこで、仏に、仏に仕える生命があれば、靈夢を見せ給えと七日間の、昔の僧の如く、祈念した。

それから五日目の夜、夢中に阿弥陀仏を拝したのである。雲中に光明が輝くと仏が下方から上に登り、白毫より光を私の身体に照らされた。私ははっと、目がさめ、おそる、おそる、盲腸を探ったのである。不思議なかな昨日までのしこりが無い、うれしくてうれしくてたまらなく、翌翌日から床を上げたのである、私には仏に仕える生命があると……

昭和二十四年三月のことである。二年間の闘病生活は一向によくもなく悪くもない状態であった。或夜こんな夢を見た。

本堂の前に男女二人の人が参り、私と一緒に参ろうとすすめている。男の人は知らないが、女の人の名も顔も知っている。二人は私にしきりにすすめるけれども、私は頑として、仏に仕える生命が目的があるから駄目だ

と言って別れたのである。

不図、目を開いて、いやな夢を見たと思つた。これは何かあったのであろう。と念仏を称えた。

やがて、朝が来た。じつと昨夜の夢を思いつつ、心の苦しさを忍んだ。食事の時、黒板を見ると、昨夜の女の人の名が書いてある。それは亡という字であった。それから一週間療養所で亡くなった人の納骨があった。知らない人である。亡くなった日は、夢の日と同じである。

何故に私は誘われた、私も同じ運命にあったのであろうかと思うと淋しくなる。然し残り生きる私がうれしくもあった。

夢は魔障多しと法然上人は教えている。幾多の夢の中に闘病し、今日まで生きて来た私、未だに、仏に仕える生命のあることを思うにつけ、臨終の日まで念仏相続し、最後の目的まで、念仏称えることが、仏に仕える生命であるように思われる。

目的に行かずして、途中の出来事に執着することはよくよく注意すべきことである。

一言伝道

み名をよぶ声に心がのせられて

よぶたび通う慈悲のふところ

散れば散り散らねば散らぬままによぶ

よぶうち過いくるぞみ心

あるままに又無きままに楽しけれ

物によどまぬ心澄まして

白は白黄は黄のままに野の小菊
とりかえられぬ尊さを咲く

——田中不又先生

「光明歌集」——

一言伝道・揭示伝道の「ことば」の欄を設けました。会員の皆様と共に利用し、育てて行き度いと思います。経文・偈文・詠歌等、感銘深い「ことば」を御投稿下さい。皆様に広く御紹介させて頂きます。

(編集部)

現在への不安と明日への期待

——末法思想と浄土教——

牧 田 諦 亮

（京大人文科学研究員・文博）

一

西本願寺の第二十二代の法主であつた大谷光瑞（一八七六一一九四八）が、遠大な意図のもとに明治三十五年から三回にわたって中央アジアなどへの探險を実施したことは、たんに日本人の海外探險旅行史上の画期的な大事業であつたといふこと以外に、その西域探險の成果としての多くの古写経類や遺品の収集は、古代仏教文化の究明の上に重要な役割を果し得るほどの貴重なものであつた。その一部分は竜谷大学に今日もなお襲蔵されているが、その多くが旅順の関東庁博物館などに展観されていたために、敗戦とともに或はソ連に或は中国にと持ち去られて、その所在を確認し得ないのはまことに残念なことである。この遺品のなかに、かつて大正大学の関口慈光教授が石井教道先生還暦記念論文集である「浄土学」特輯号に最妙勝定経という疑経のあることを、その本文

と校証を附して紹介されたことがある。この最妙勝定経は、六朝時代、梁の武帝の世（五三五年頃）にはすでに撰述されていたようである。釈尊と文殊菩薩とが議論をして、そのためにともに地獄に堕ちたなどということも説いてあつて、実践を怠り、つまらぬ議論に拘泥することを戒めている。とくにこの経の眼目とするところは、仏滅後を、八十年後、三百年後、三百年後五百年前、五百年後八百年前、八百年後千年前、千年後千三百年前の六時期に区分していることである。仏滅時を去るごとに漸次正法がうすらいで、仏教界も一般の社会も仏陀の真精神を忘れて、不法不倫のことを敢て行ふような澆末の世となってゆく過程、すなわち末法の世相の現実を説きあかしている。さきに述べたように、末法の区別にも五百年ごとの五段階にわけて説く大集経月藏分などの説もあるのであるが、いずれもその要は、非道德的な現実の社会の

実相を直視しての、現在^{いま}への不安をくわしく説いたものである。この末法の六期にあたる仏滅後千年から千三百年までの間には、わが諸弟子は俗服を着し、袈裟をつけるとはいっても木偶^{でくのぼ}につけさせたようなもので、何の威厳もない、だから世界の人はこのような僧侶を見ても恭敬^{うやまい}の念をおこさない、諸国の間には戦火あいつぎ、ともに殺しあい、そのためには君臣父子兄弟の別もない、人々の行ないはあたかも悪馬狂象のごとくで、とどめようもない、口に悪言をいだし、心に悪念を生じて、教法を聴くなどのことは全くなき、慈悲の心もなく飲酒食肉に日を送るような、破戒無慚なたよりない日常生活の様子をつまびらかに説いている。この最妙勝定経も、他の疑経と同じようにおそらくこの経の撰述された当時の破戒無慚な教団内部の実情や、戦争にあけくれる社会の不安な現実を背景として、いかにしてその苦難の中から離脱超克し得るかを真剣に反省したものにちがいないのである。この最妙勝定経は、この末法の時代には、四重五逆の極悪の罪人も禪定（心をしずめる）を修することによって禪定の力によってのみ、その罪は自ら除滅すると説いているが、中国において中国的仏教の開創者といわれる天台宗の祖智顗の師として知られた南岳慧思（五一五—五七七）は実にこの経を読んで、新時代にふさわしい末法仏教を中国において最も早く提唱し

たのである。

二

南岳慧思の現在の仏教に対する反省は、その求道の過程を記録した「南岳思大師立誓願文」に見ることができる。正法五百年、像法千年を経て、末法万年の中の第八十二年、北魏延昌四年（五一五）に生まれた慧思が十五才で出家して後、世の無常と人生のはかなさを痛感して、一切衆生のため、自身のために解脱を求めんがために菩提心をおこして大誓願をたてたのである。その過程にあつて、しばしば悪人のために毒を飲まされ、食をうばわれるなどの危難にあうことも再三であつた。そのような困難にもうちかつて、法華経、摩訶般若経その他の大乘の諸経に暁通して、ひたすら末法の時期に相応した経説を求めたのである。立誓願文には、仏説無量寿経の四十八願の経説になぞらえて、

もし我仏を得たらんに、十方の世界にもし衆生あつて五逆罪を具してまさに地獄に随つべきものも、命終にのぞんで、善知識の我が名を称^{とな}えることを教うるに値い、罪人^{しゅじやう}これを聞きおわつて合掌して我が名を称え、声声絶えず、十念を称え終ればまさに命終せんとするの時、まのあたり我（仏）を見ることのできるであろう（中略）若ししからざれば妙覺を取らじ。

など、仏名を称えることによって仏国に往生すること、を説く、また十方の衆生が仏の名字を聞いて持戒精進して菩薩となる六度に行を修して七日乃至三七日に及べば仏を見たてまつることを得て一切の善願が具足するし、百千の病苦や業障をもっていたましい不具の身となった人も仏名を称えつづけるならば、病苦は消滅して不具の身も平復することができると、たやすく自分の周囲に見だされるもろもろの不安の諸相を述べて、現在のいとうべく悲しむべきことを明している。そして末法第一百二十五年、すなわち陳の武帝永定二年（五五八）慧思四十四才の時に、光州（河南省）大蘇山で一切衆生や自身の功德済度のために金字摩訶般若波羅蜜經、金字妙法蓮華經を造ったのである。その翌々年にのちの天台宗祖智顗は慧思に師事しているし、さらにその二年後には道綽大師が山西省并州に生れた。慧思が立誓願文を書いてから九年目、北齊の天統二年（五六六）には、六朝時代末期の中国仏教界に末法仏教の流行する思想的根拠としての大集月藏經十巻が那連提耶舎によって翻訳されている。さらに末法思想によって三階教を開宗した信行（五四一—五九四）はこの時まだ二十六才に青年僧であった。また北周の武帝が仏教道教を弾圧して僧尼道士ら二百余万を還俗させ（五七四年）、さらに北齊を亡ぼしてその占領下の仏教教団を徹底的に破壊し

た（五七七年）という廃仏事件は、古来、六朝末期、隨唐初にかけての末法仏教の興起の有力な具体的原因とされているのであるが、南岳慧思が最妙勝定經を讀んで、末法到来の意識にめざめ始めた彼の熱心な正法護持の運動が、かえって教団内部からも毒殺その他に陰險な手段で酬われるというような、まさに末法の世相というべき刻薄な現実の社会や政治的權力をもつてする教団の破壊の惨状をみて当然そこには、現在の仏教、社会に対する不安と失望、よりよき未来の社会に対する期待と熱望、そうしたものが、ついには直接末法の世に対応する信行の三階教教団を出現せしめることとなったことは当然のいきおいであったと思われる。

三

三階教に始祖信行はその壮年時代を、北シナの仏教の中心地であった北齊の首都の鄴（いまの河南省安陽、また相州ともいう）で仏道の修業につとめていた。三十七才の時、あたかも北周の武帝の大軍が北齊を攻めて、従来の仏教寺院僧何万何十万といわれる僧尼も強制的に還俗させられた、信行もおそらく還俗を余儀なくされて、山間に身を潜めていたのであろう。その沈潜していた間に信行が考えた、不安と失望の中に生きている現在の私たちにとってふさわしい仏教とはいかなる仏教であろうか、従来のような砂をかむように味のな

い、難解な經典の講釈、それがはたして私にふさわしい仏教であろうか、明日をも計り知ることのできぬ戦乱の渦中にまきこまれたり、ちりやあくたのようなたよりない人間、罪惡をおかすことなくしては生きておれないような人間にとって、過去の仏教ではもはや救われない。現在の私にふさわしい宗教としての三階教が信行によって提唱されたのは、きびしい廃仏を實行した北周王朝が亡びて隋が国を建て、仏教の復興を宣言した文帝の開皇元年（五八一）、信行が四十一才の時であつた。

仏滅後五百年までの正法の残されている時期、（第一階）、仏滅後五百年から千五百年までの（にかよつたほう）像法の残されている時期（第二階）の時代の人たちにはそれぞれ一乗とか三乗とかの「別法」によって、特定の經典を中心としてさとりを得ることができたが、仏滅後千五百年を経過してしまつたいま末法の時代（第三階）には、社会は濁り乱れているし、人間も仏陀の經説や聖人の証法をききわけて、自分の機根にもっともふさわしい仏法を選び出す能力も持たないもので、生まれながらの盲人とことなることはない。したがって、現在の仏教学者が勝手に華嚴經とか法華經とかを選択して、自己の見解をもつて仏陀の說法（經典）に、初めの說法とか最後の說法とか、そのほか浅深高下の批判をつけ加えたりすることは、

およそ身のほどを知らぬ、生盲の我が身であることを忘れて、仏法を誹謗するものであり、大罪を犯すものである、いま末法の世（第三階）の凡夫にふさわしい教は、經典にも、仏菩薩にも何等の選択をも加えることなく、普く敬い、普く行なうという三階教である。とるに足らない自分の分別というものを投げすてて、謙虚に「普法」をもつておのれの宗乘（おしえ）としなければならぬ。世間のすべての汚れた、また清らかな現象は、凡夫の心の中に迷のためにおおいにかくされていゝる、わたしが如来（ほとけ）となり得る可能性↓如来藏からおこるものであり、この如来藏は私だけでなく、誰れもがみな持っている。すべての人は、どんな人に対しても、この人は将来必ず仏となる人であることを知って拝み、お互いに尊敬しあつて行かねばならぬ、このような実践仏教こそ、末法、第三階の世に生まれた私たち罪惡の凡夫が救われる道である。かくしてこそ、現在の不安におののく私たちも、明日へのあかるい希望にみちた日々が約束されるのであると、信行は説くのである。

信行の三階教は六朝末期、世間によく行なわれていた末法觀を足場として、現実生活の不安に徹底的なほりさげを試みた。生ける凡夫の不安さだけでなく、生活している社会のたよりなさ、みにくさを強調するあまり、時の政治権力者の施

政への痛烈な批判となって、世人を同調させることもしばしばあった。このような宗教の領域をこえた政治批判は、人間の生活に密着した宗教であればあるほど、当然おこり得るものであったが、時の王朝にとってはすこぶる不愉快なできごとであったことにはちがいない。また同時代の教団にとっても、新興宗教の時代にめざめたこの批判は、自己の存立を根底から揺りうごかす、危険なものであった。信行の死後まもなく、三階教団は正教ではないとして政府からの弾圧を受け表面的な活動は禁止された。しかし実際はなやかではないが、その後も長く法燈を維持したことはよく知られている。同じ末法觀に立って、ひとしく六朝末期から隋、唐初にかけて中国の社会に流行した浄土教は、それでは三階教とはどのようなちがいがあるのであろうか。

四

弥陀一仏に帰依する浄土教は、三階教の立場からは「別法」の徒として当然排撃される立場にあった。しかし両者を比較してみるならば、浄土教も三階教も、ひとしく機根下劣の凡夫が住んでいる現在、「末法」の世を立脚点としていること、五濁惡世ではなかなかにとり得がたいこと、機根も劣り罪惡を多くなす凡夫の意識に徹していること、ともに学解をすてて時代と機根に応じた教法の實踐（機教相應）を

説いていることなど、共通点もすこぶる多い。ただ三階教があまりにも現在を重くみるあまり、政治への忌憚ない批評をなし、同志はお互に敬礼しあって、常不輕菩薩のごとしと評されながら、異信者に対しては積極的にこれを排撃してはばからないし、信者の普施をおさめる無尽藏院の設置も、三階教の教義にもとづく寺院の修繕費用、貧民救済、三宝供養などに重点をおいたものであるが、後には寺院の営利事業として、本来の目的を失うなどのこともあった。ややもすれば宗教信仰と政治經濟運動との混淆をきたしたことは、機教相應をほこる三階教団としては、かえってみずから教勢をよわめる傾向をもたらしした。これに対して、同じく機教相應をはたじるしとして末法仏教をさげんだ道綽大師やことに善導大師の浄土教は、さらに深く自分をほりさげて、徹底した自己批判―常に没し常に流転して苦界から出離する縁をもたない凡夫の不安さ、ひたすら弥陀仏に帰依して、疑いなく、慮ばかりなく、仏の本願に乗じて喜んで往生を得んとの、凡夫の決定的な明日への期待のなかに没入しきった純粹でまじりけない宗教として、ついに世人のもっとも大きな信頼をから得たのではなからうか。曇鸞大師、道綽大師と次第した中国の浄土教は、かくて善導大師によって、時機相應の中国人の宗教として、大きく発展してくるのである。

編集後記

▽創価学会は、いよいよ衆議員にも出馬すると発表した。絶対出ないといっていたが、実力がでてくるとこの変貌ぶりである。何をやりだすか分らない。大いに警戒せねばならない。

▽竹中博士訳の、マレット「宗教と呪術」がいろいろの意味で問題になっている。「念仏は呪術か」というところが問題になったこともあるが、そんな意味で熟読したい本である。

▽鎌倉大仏の佐藤雄氏は外交官としてバキスタンに駐在しているが、現地で結婚式をあげ、ギリシヤに新婚旅行とか。世界もせまくなってきた。

▽浄土のふり読者である大正大学教授の上村真肇博士が、にわかに去る三月十五日遷化され、その本葬が

五月四日ゆかりの伝法院においてしめやかに営まれた。博士は天台宗の人であつたが、本会にも非常な好意を寄せられ、また、適切なご批判をいただいていた。五十六才の働きざかりで急逝されたことは惜しまれる。

▽いま作家の佐藤春夫氏がラジオ放送録音中突然逝去すとの訃報に接す。五月六日午後六時十五分。佐藤春夫氏とは浄土も深い因を縁むすばせていただいた。戦前法然上人の伝記を数十回にわたって執筆されたときその格調の高い文章に多くの読者は魅了され、上人を渴仰したものである。親鸞研究を通して浄土信仰を語る作家は多いが、その師法然上人に傾倒して自身の念仏信仰を深めていった作家はごく少ない。その希有の人であつた。宗祖七百五十年御忌を前に出版された、「極楽からきた人」をいま

再び手にして、ゆく春を待たずに静かに七十二才で極楽へかえられた老詩人を、ただただ追慕するのみ。なむあみだぶつ。最後の句、春灯（はるともし）立たす女神の腹ひかる。

▽浄土編集同人の正大講師安居香山氏がこんど浄土宗代表の同大学幹事として活躍することとなった。ややもすると老キユウ化している宗門大学のむずかしい経営に新風が吹き込まれるものとその手腕が期待される。勿論、浄土は今迄通りハッスルしてもらう。

▽本会も創立されて今年で三十周年になる。創立と同時に「浄土」が月刊されてはや三十巻。光陰瞬時の感を深くするが、これを機会に、本会の発展と、浄土の拡充を期して種々記念事業を企画している。一層のご鞭撻のほどを。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 六月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年 五月廿五日 印刷

昭和三十九年 六月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

宗教科教育の好テキスト

マレット著

竹中信常訳

A5版
定価 二五〇〇円
価 一八五〇円

(但し都内は五〇円)

宗教と呪術

——比較宗教学入門——

人間存在の根底に横たわる「宗教と呪術」の問題を解明し、宗教の真実の在り方を鮮明した宗教学の名著を、訳者十数年の刻身のほん訳。

東京都文京区大塚窪町二四

発行所 誠信書房

振・東京・一〇二九五

日本一の生産・設備

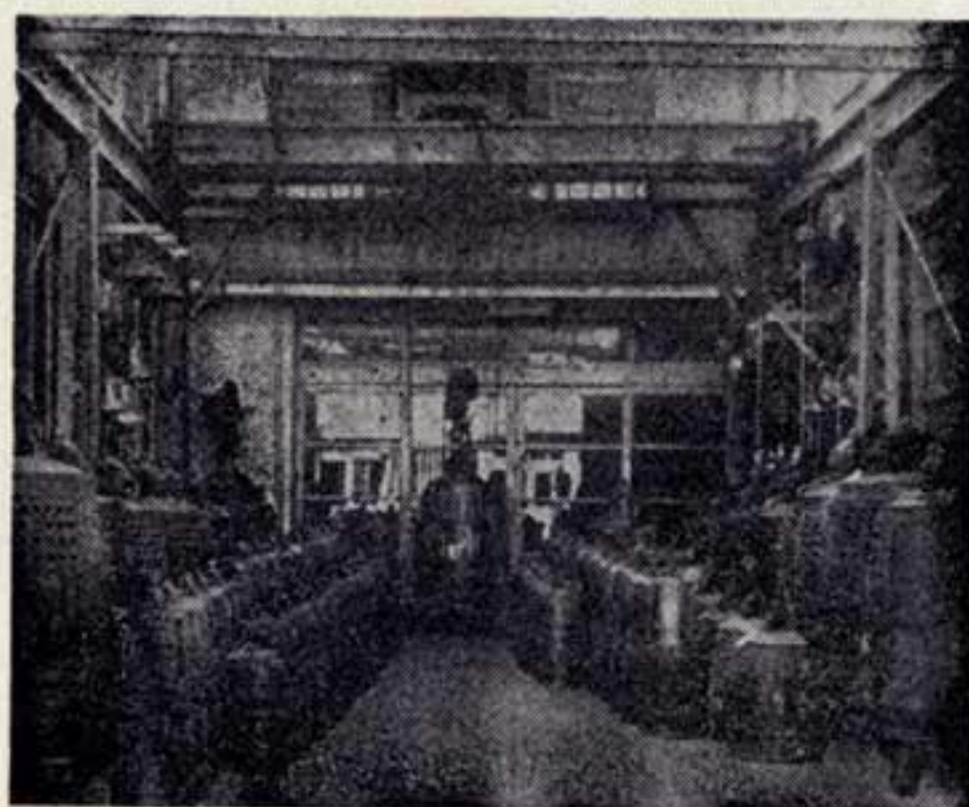
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田